【研究ノート】

日本語教育における初級語彙に関する諸問題

── 自主教材『くすのき』の語彙選定を巡って ──

舛井　雅子・片山きよみ

要　旨

自主教材「くすのき」の語彙は、学習者にとって必要な初級語彙を満たしているだろうか。一般的、基礎的な語彙と、特定の学習者のための独自の語彙という二つの柱を軸に検討していく。一般的、基礎的な語彙の基準として「３・４級語彙」及び「基本語彙」を用い、「くすのき」の語彙の分析を試みる。さらに、「くすのき」に提示されていない「３・４級語彙」を品詞別に見ていきながら、本教材に欠けている初級語彙を明らかにする。

また、「３・４級語彙」および「基本語彙」の両方に含まれていない語に、「くすのき」独自の語彙が含まれると考え、これらの語彙が学習者のニーズに応えたものであるか、独自語彙の選定のあり方について検証する。

最後にこれらの分析を通して見えてきた「くすのき」の語彙選定に関わる問題について考察し、解決の方法を探りたい。

1. はじめに

筆者達が作成した初級日本語の自主教材「くすのき」の試用版が、熊本大学国際化推進センター国際化部門の初級クラスで使われるようになってから、既に３年、６学期が過ぎようとしている。

各学期が終わるごとに、「くすのき」を使用した教授者の指摘や感想に基づいて、単純な語句のミスはもちろん、教授項目を入れ替えたり、練習の型を変更したりして、より使いやすい教材にするための手直しを重ねてきた。３年が過ぎて、教授項目や練習の内容についてはほとんど完成したと思われるが、最近は、「語彙が少ないのではないか」「難しい語彙を早い課で提出していることが、学習者の負担になっているのではないか」など、提出語彙についての問題を指摘する声が聞かれるようになっている。

筆者達がこの自主教材「くすのき」の作成を開始する際、「実際のコミュニケーションに役立つ熊本版の文法教科書を作る」という共通認識を確認し

た（片山他、2008）程度で、細かい点についての議論は不十分なままであった。提出語彙についても同様で、どのような語彙を、どんな順序で提出するかなどを事前に決めておいたわけではなく、編集に携わった4名が、各課を作成しながらどんな語彙が必要か、各自の経験に基づいて判断し、選定していった。その際に共通認識としていたのは、従来の初級日本語の教科書に取り上げられていないような難しい語彙でも、学習者が日本（熊本）での生活に必要だと考えられるものは、理解語彙として取り上げるということであった。

神崎・今西（2007）で指摘されている通り、「初級教科書間で統一された初級教科書提出語彙があるわけではな」く、「それぞれの教科書の著者が日本語能力試験出題基準に必ずしも拘束されることなく、それぞれの教科書の目的に沿った提示語彙を選定している」（同）わけで、「それぞれの教科書に提示されている語彙は、その教科書を使用する学習者が日本語学習の初級段階で学習しておく必要があると、それぞれの教科書の著者が判断した『初級語彙』」（同）ということになる。したがって、「『初級語彙』の選定基準、特に『基本語彙』以外の語の選定基準は学習者のニーズが重視されるので、『初級語彙』としてどんな語を提示するかが、どのような学習者を想定して教科書が作られたかによって大きく異なる」（同）と言える。

自主教材「くすのき」の場合、「熊本に来た留学生が、大学や日常生活などにおいて実際に経験するであろうと思われる場面を想定し、その場面で活用できる表現を学習し、使えるようになる」ということが学習目標である。語彙に関しては「大学や日常生活で必要となるような語彙を選び、繰り返し同じ言葉を使用して、文型と語彙が記憶に残ることを目標とした。」（片山他、2008）この方針に沿って、例えば第2課では「学生証」「外国人登録証」などの語彙を、「来日間もない学生に必要と思われる語彙」（同）と判断し、取り上げている。

「くすのき」を6学期の間使ってきて、「語彙が少ないのではないか」「難しい語彙を早い課で提出するのは、学習者の負担になっているのではないか」などの声が、教授者から上がるようになったことは、前述した通りである。筆者達が目指したものと、実際の教育現場で齟齬が生じているとすれば、具体的な問題点を明らかにし、何をどのように修正すれば解決できるのか検証しなければならない。この研究ノートでは、「くすのき」で取り上げた語彙を、「日本語能力検定試験出題基準」に示された4級及び3級の文字・語彙

（以下、「３・４級語彙」）、「日本語教育のための基本語彙調査」（国立国語研究所、1984、以下、「基本語彙」）、他の初級教科書に提示された語彙等と比較検討し、「くすのき」の語彙選定を巡る問題点を明らかにしたい。

2. 「くすのき」の語彙分析

2. 1 「くすのき」の総語彙数

まず、本稿で扱う「くすのき」の語彙について説明しておく。同教材では新出語彙を次のように提示している。

①各課の初めに「新しいことば」として語彙リストを付けた。

②一部の語彙については、学生の使いやすさへの配慮から、「新しいことば」に入れず練習問題の近くに配置した。

③課末の「会話」教材（「読み物」「日記」「メール」等も含む）には、それぞれの先頭に未習の語句や表現の説明をつけた。ここでは、「読み物」「日記」「メール」等も含めて、「会話」の語彙とする。

①および②を合わせた「くすのき」の総語数は964語であった。③の「会話」については、表現に関するものと「新しいことば」と重複する語を除いた異なり語数は228語となり、①②③を合わせて1192語となった。神崎・今西（2007）によると、他の初級レベルの教科書では、【表１】のように1400～1600語以上の語彙が提示されており、これらと比べると、③を加えても、「くすのき」の語彙数は少ない。

【表１】語数

みんなの日本語	1661語*
SFJ	1401語*
初級日本語	1667語*
くすのき	964語 （1192語）「会話」の語彙も含む

*神崎・今西（2007）による

課末の「会話」は、学習した文法項目が日常会話でどのように使われるかを示すために入れたものであり、「会話」だけでは網羅できない語句や表現に対応するため、「読み物」や「日記」「メール」等も加えた。学習者が耳にすると思われる語や表現は早く取り入れるという方針に基づき、難易度や提

示順にこだわらず、未習の文法事項や語彙を使っている場合もある。

従って、本稿では、上記の①および②を「くすのき」の提出語彙と考え、主たる分析の対象とする。分析結果については③の「会話」の語彙も併せて考察していきたい。

2．2 「くすのき」における４級及び３級語彙の割合

「くすのき」にはどのようなレベルの語彙が含まれているか、一般的に初級語彙の目安とされる「３・４級語彙」の割合を見ながら確認する。４級語彙表に掲載された727語を「４級語彙」、３級語彙表の1409語中「４級語彙」を除いた682語を「３級語彙」とする。

【表２】では、「くすのき」の語彙について、それぞれの品詞ごとに、「４級語彙」及び「３級語彙」の語数と割合を示した。品詞は、初級日本語で扱う文法項目との関連を考慮し、表のような10種に分類にした。

【表２】「くすのき」に含まれる４級及び３級語彙の割合

くすのき総語彙数		４級語彙		３級語彙		４級＋３級語彙	
品詞	数	数	%	数	%	数	%
名詞	569	268	47.1%	89	15.6%	357	62.7%
動詞	237	103	43.5%	101	42.6%	204	86.1%
い形	48	38	79.2%	7	14.6%	45	93.8%
な形	21	15	71.4%	3	14.3%	18	85.7%
副詞	38	22	57.9%	10	26.3%	32	84.2%
疑問詞	9	8	88.9%	0	0.0%	8	88.9%
指示詞	7	7	0.0%	0	0.0%	7	100.0%
接続詞	2	0	0.0%	2	100.0%	2	100.0%
接尾辞	17	15	88.2%	1	5.9%	16	94.1%
その他	16	2	12.5%	2	12.5%	4	25.0%
合計	964	478	49.6%	215	22.3%	693	71.9%

「くすのき」の総語彙964語のうち、「４級語彙」は49.6%、「３級語彙」は22.3%であり、合わせて71.9%が「３・４級語彙」であった。

まず、名詞を見ると、名詞における「４級語彙」の割合は47.1%と半数以下であり、「３級語彙」と合わせても62.7%と、他の品詞と比べてかなり低い。これは、「くすのき」の特徴と言うよりは、前章で述べたように、その

教科書がどのような学習者を想定しているかによって扱う場面が異なり、取り上げる場面によって提示する名詞も異なることが大きな要因であると考えられる。また、「くすのき」独自の語彙が他の品詞よりも多く含まれていることも一因だと考えられるが、これについては次章で考察したい。

動詞は「４級語彙」と「３級語彙」がほぼ同数で、他の品詞と比べると、「３級語彙」の割合が多くなっている。しかし、い形容詞、な形容詞はともに「４級語彙」の占める割合が高く、副詞も「４級語彙」が過半数を超えている。接続詞を除き、疑問詞や指示詞、接尾辞（助数詞を含む）についてもほとんどが「４級語彙」である。

「くすのき」の語彙は総数の約７割が「３・４級語彙」であり、「４級語彙」が約半数近くを占める。「くすのき」が提示した語彙は、全体としては初級語彙の中でも基礎的な語が多いと言えるが、３・４級以外の語彙が多く含まれる名詞や、「３級語彙」が40%以上を占める動詞には、初級日本語の学習者にとってはやや難しい語彙が含まれていると考えられる。

２．３ 「くすのき」に含まれる「基本語彙」の割合

『日本語教育のための基本語彙調査』（1984）の「基本語彙」は、日本語学習者が「専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基礎的な語彙について妥当な標準を得る」という目的で選定された六千語で、中でも最も基本的な語を「基本語二千」として示している。【表３】は、この「基本語六千」及び「基本語二千」に含まれる語、含まれない語の割合を示したものである。「くすのき」の84.7%は「基本語六千」に含まれる一般的・基礎的な語であり、さらに、68.8%は「基本語二千」に含まれ、学習者が初めに学ぶべき最も基本的な語であるということになる。

【表３】「くすのき」に含まれる「基本語彙」の割合

くすのき総語彙数	「基本語彙」に含まれる語		「基本語彙」に含まれない語
	「基本語六千」	「基本語二千」	
964	816	665	148
	84.7%	68.8%	15.3%

一方、これらの「基本語彙」に含まれていない語彙も15%以上あり、先に見た「３・４級語彙」に含まれない30%近い語も併せて注目すべきであろう。これらの語の中に、本教材を特徴づける独自の語彙が含まれていると考えられるからであるが、この点については４章で検討する。

3.「くすのき」に提示されていない「３・４級語彙」

3．1「３・４級語彙」全体に占める「くすのき」語彙の割合

「くすのき」の語彙の70%以上が３級及び４級の語彙であり、85%が「基本語彙」に含まれることがわかったが、これだけでは、学習者に必要な初級語彙が十分提示されているとは言えない。「３級語彙」及び「４級語彙」の総語彙数のうち、どのくらいの語が「くすのき」で提示されているか見ておく必要がある。【表４】は、「３級語彙」「４級語彙」の中で、「くすのき」で提示された名詞、形容詞、動詞、副詞の語数と割合を示したものである。

【表４】「３・４級語彙」全体に占める「くすのき」語彙の割合

	３・４級語彙		「くすのき」提示語		「くすのき」未提示語	
		語数	語数	%	語数	%
名 詞	４級語彙総数	420	270	64.3%	150	35.7%
	３級語彙総数	338	94	27.8%	244	72.2%
	４級＋３級語彙数	758	364	48.0%	394	52.0%
動 詞	４級語彙総数	119	103	86.6%	16	13.4%
	３級語彙総数	218	104	47.7%	114	52.3%
	４級＋３級語彙数	337	207	61.4%	130	38.6%
形容詞	４級語彙総数	82	54	65.9%	28	34.1%
	３級語彙総数	45	10	22.2%	35	77.8%
	４級＋３級語彙数	127	64	50.4%	63	49.6%
副 詞	４級語彙総数	25	21	84.0%	4	16.0%
	３級語彙総数	38	11	28.9%	27	71.１%
	４級＋３級語彙数	63	32	50.8%	31	49.2%

「４級語彙」のうち「くすのき」に提示された名詞の割合は64.3%、形容詞も65.9%にとどまっている。「４級語彙」は初級語彙の中でも基礎的な語であり、この数字は少ないと感じる。また、「３級語彙」については、動詞の割合は47.7%、形容詞、副詞は、ともに20%代とさらに低くなっている。

初級教科書に「３級語彙」をすべて提示するのは無理である[1]し、他の主要な教科書でも「３級語彙」の全部を提出しているものはない[2]と思われるが、特に動詞、形容詞、副詞については、どのような語が「くすのき」において未提出となっているのか、その中で、どんな語を補うべき語として考えなければいけないのか、具体的にさらに検証する必要があるだろう。

３．２ 「くすのき」に提示されていない３・４級の動詞・形容詞・副詞

ここでは、どのような語を補う必要があるのか具体的に検討していきたい。先に述べたように、名詞の場合は、取り上げる場面によって選択される語彙が大きく異なると考えられるため、名詞の未提示語についてはここでは扱わず、以下、動詞、形容詞、副詞の未提示語について順に見ていく。

【表４】で示したように、４級の動詞の90％近くは網羅されているが、「傘をさす」や「切手をはる」「違う」（動詞ではないが、「同じ」も未出）など、日常よく使う語彙が落ちている。

３級動詞についてはほぼ半数しか含まれていない。上の表に挙げた114語の未提示語中には、普通初中級や中級レベルの教科書で取り上げられ、初級学習者には必ずしも必要と言えない動詞も含まれており、初級では使う機会がないと思われるもの（「差し上げる」「やる」など）や、同じ意味を表す他の表現が既出のもの（「（写真を）写す」:「（写真を）とる」が既出である）などは、編集過程で意図的に省いた。

ただ、【表５】を見ると、「驚く」か「びっくりする」のどちらか一つ、「けがする」「研究する」「出席する」などは入れてもいいのではないかと思えるし、他の動詞についても検討の余地があると言えそうである。また、「新しいことば」では、基本的に初出の時の品詞で表示したため、「名詞＋する」の表示に一貫性がない。索引をつける場合は「名詞＋する」の扱いについても今後考慮したい。

【表５】「くすのき」に提示されていない「３・４級動詞」

４級 （16語）	上げる　ある（所有）　要る　生まれる　売る　曇る　答える さす（「傘をさす」）　質問・する　締める　違う　勤める　並ぶ 並べる　はる（「切手をはる」）　吹く
３級 （114語）	あいさつ・する　合う　空く　上がる　集まる　集める　謝る 生きる　祈る　植える　打つ　写す　移る　おいでになる　行う 踊る　驚く　思い出す　下りる　（壁に絵を）かける　（心配を） かける 勝つ　かまう（「かまいません」）　通う　乾く　決める 競争する　比べる　暮れる　計画・する　経験・する　けが・する 下宿・する　研究・する　見物・する　故障・する　下がる下げる　差し 上げる　支度・する　失敗・する　失礼・する　出席・する　出発・する 承知・する　過ぎる　（おなかが）すく　（電車が）すく　進む すべる済む　生産・する　世話・する　戦争・する　育てる　退院・する 倒れる 足す　訪ねる　尋ねる　楽しむ　足りる　注射・する 捕まえる　漬ける　続く　続ける　包む　釣る　連れる　通る 届ける　取り替える　直る　治る　無くなる　亡くなる　投げる 鳴る　慣れる　入院・する 似る 濡れる　残る　乗り換える　運ぶ 冷える光る　びっくりする　引っ越す　開（ひら）く　拾う　増える 返事・する　放送・する　負ける　回る　見つかる　見つける　迎える 向かう　申し上げる　戻る　焼く　（雨が）やむ やる（「あげる」の意味）　輸出・する　輸入・する　揺れる 用意・する　寄る　利用・する　沸かす　別れる　沸く

【表４】でわかるように、「くすのき」には４級形容詞の65.9%しか提示されていない。３級に関しては22.2%である。これらの３・４級形容詞は、すべて「基本語彙」にも含まれている。だが、【表６】に挙げられている中で、「くすのき」に提示されていない「熱い」「冷たい」「太い」「細い」「強い」「弱い」「厚い」「早い*」「遅い」なども、初級で入れておきたい形容詞である。色に関する形容詞もどこかでまとめて提示しておきたい。実際には、授業中に何らかの形で補充することが多いが、その時に担当する教師任せになってしまっているわけで、こういう形で基礎的な初級語彙を導入するのは、やはり問題があると言わざるを得ない（*「早い」は会話にはあるが、本文には「早く」のみ）。

形容詞の導入に関しては、「くすのき」の編集当初は、活用を覚えなければならない学生の負担を考慮し、意図的に初出の形容詞の数を少なめにしたのだが、少なすぎるのではないかとの意見が出て、後で追加した経緯がある。学生の負担と必要な語彙数との兼ね合いがを考えながら、徐々に増やしていくなどの配慮が必要であった。どんな語彙を入れるかという選択の問題だけ

でなく、導入の時期も考慮しなければならない。

また、「いや*」「すごい」「ひどい」など、日常よく使われるような形容詞は、どこかで補っておきたい（*「いや」は「会話」に提示）。

【表６】「くすのき」に提示されていない「３・４級形容詞」

４級 （28語）	青い　熱い　厚い　薄い　大きな　遅い　黄色い　汚い　暗い　黒い 白い　少ない　小さな　つまらない　冷たい　強い　ぬるい　早い 太い　細い　まずい　丸い　易しい　弱い　結構　いや　丈夫 りっぱ
３級 （35語）	浅い　美しい　うまい　おかしい　堅／硬／固い　厳しい　細かい すごい　すばらしい　正しい　苦い　恥ずかしい　ひどい　深い 珍しい　柔らかい　よろしい　危険　急　十分　安全　盛ん　残念 大事　確か　だめ　丁寧　適当　特別　必要　複雑　不便　変 まじめ無理

【表７】「くすのき」に提示されていない「３・４級副詞」

４級 （4語）	たいへん（「たいへん大きい」）　たぶん　だんだん よく（「よくできる」）
３級 （27語）	必ず　きっと　決して　さっき　しっかり　しばらく　すっかり ぜひそろそろ　だいたい　たとえば　たまに　ちっとも　とうとう 遠く　特に　どんどん　なかなか　なるべく　なるほど　はっきり 非常に　ほとんど　もうすぐ　もちろん　最も　やはり／やっぱり

「実際のコミュニケーションに役立つ文法教科書を作る」という「くすのき」の最も基本的な作成理念に基づき、副詞は意識的に取り入れるようにしたため、４級の副詞の84.0%が含まれており、未提示語は４語だけであった。そのうち、「たいへん」と「よく」は別の品詞や見出し語では提示されており、全くないのは「たぶん」と「だんだん*」の２語であった（*「だんだん」は「会話」には提示）。

「たいへん」は形容詞として出されているが、副詞としての提示はない。また、「よく」は頻度の副詞のみで、「よくできる」「よくわかる」の意味での提示はない。「４級語彙」ではこれらは別見出し語として出されており、「くすのき」の場合も、意味の異なる語は同じ品詞でも別語として出したほうが学生にとって分かり易かったかもしれない。

３級の副詞は未提示の割合が高く、28.9%しか含まれていない。「ぜひ」「たまに」「もちろん」「たとえば」などは、「会話」に提示されているが、そ

の他の副詞についても、日常的に使用頻度の高いものはもう少し多く取り上げたい。

4. 自主教材「くすのき」独自の語彙に関する考察

前章では、「日本語能力検定試験出題基準」に示された３・４級の文字・語彙（「３・４級語彙」）及び、「日本語教育のための基本語彙」（「基本語彙」）に取り上げられているが、「くすのき」では提示されていない語彙について検証した。この章では、逆に、「３・４級語彙」及び「基本語彙」に取り上げられていないが、「くすのき」には提示されている語彙【表８】、つまり、これまでの一般的な初級語彙の範疇に含まれていない、「くすのき」が独自に取り上げた語彙(3)について検証する。

【表８】「３・４級語彙」「基本語彙」に含まれない「くすのき」の語数

くすのき総語彙数	３・４級語彙に含まれない語数	基本語彙に含まれない語数	３・４級語彙にも基本語彙にも含まれない語数
964	271	148	123
	28.2%	15.3%	12.8%

まず、総語彙数964のうち、「３・４級語彙」にも「基本語彙」にも含まれない「くすのき」の〈独自の語彙〉は123語（12.8%）で、他の初級教科書に比べて総語彙数が少ないことを考えれば、この数は多いと言えるだろう。この123語を内容別に示したものが、次の【表９】である。（「カタカナ語」は、大学や生活等に関わりの薄いカタカナ語を取り出してまとめたものである。）

【表９】を見てまず気づくのは、大学や生活に関する語が多いことである。「熊本に来た留学生が、大学や日常生活などにおいて実際に経験するであろうと思われる場面を想定し、その場面で活用できる表現を学習し、使えるようになる」ことを目標とする編集方針で「くすのき」を作成したことを考えれば、これは当然の結果と言える。例えば、「生活に関する語」の中に「むかむかします」「吐き気」「鼻水」「二日酔い」「保険証」など、病気・病院に関係する語彙が多い。これは、初めて日本へ来た留学生にとって、病気や病院に関することは切実な問題であり、早く提示した方がいいとの判断に従った結果である。また、「水道代」「電気代」「バス代」なども、日本で生活を始めるとすぐに必要となる語彙と考え、２課の文型「～代はいくらですか」

【表９】「くすのき」独自の語彙の内訳

内　　容	計123	３・４級語彙と基本語彙のどちらにもない語
熊本に関する語	6	あまくさ　上通　熊本城　交通センター　下通 鶴屋デパート
大学に関する語	17	～号館　医学部　学生証　教育学部　工学 工学部交流室　コンパ　コンピュータ室 指導教員　生協大学院　文学部　法学部 保健センター　薬学部　１時間目
生活に関する語	35	海外旅行をします　（時計を）セットします むかむかします　メールチェックします ATM　エアコン　エコバッグ　横断歩道 外国人登録証　カラオケ　キャッシュカード キャンプ　きゅうす携帯電話　交通事故 コピー機　コンビニ　JR　自己紹介　水道代 チケット　通帳　電気代　電話代　電話番号 吐き気　バス代　鼻水　二日酔い　部屋代 保険証　本屋　目覚まし時計　リサイクル
新しい機器類	5	携帯電話　CD　DVD　電子辞書 ノートパソコン
カタカナ語（生活外）	14	ジョギングします　アドバイス　アンケート オレンジジュース　ガイドブック　コンパス サッカー　ジャズ　ソファ　バイク ハンバーガーヘルメット　ラーメン　ロック
助詞、副詞、連語等	11	から　しか　まで　までに　すごく　まだまだ たった今　早く　歩いて　今から　～日間
月　日	14	１月　２月　３月　４月　５月　６月　７月　８月 ９月　10月　11月　12月　14日　24日
地名等（熊本以外）	7	オーストラリア　カナダ　京都　ソウル　東京 福岡　富士山
その他	14	描きます　連れて行きます　かっこいい 体が不自由な　火星　銀行員　結婚式 こどもの日茶道　自動車学校　乗務員　納豆 ぬいぐるみ　一晩

の代入練習に使うキューとして提示した言葉である。

反面、「熊本に関する語」が少なく、「熊本版の初級教科書」という目標に反するように思える。今回の語彙リストは、２章で述べたように本文に提示されているもののみを取り上げている。実際に編集してみると、本文の練習では熊本の地名などを使いにくいことも多く、結局、課末の「会話」に盛り込むというケースが多くなった。例えば、熊本大学の寮の住所（３課）、阿蘇・草千里（５課）、美術館・伝統工芸館・水前寺公園・市電（以上10課）、

市立体育館・水道町（19課）などが、会話の語彙として提示されている。また、最後の36課では、熊本市のゴミの分別をトピックに会話が展開される内容で、これも熊本での日常生活に必要と考えて編集したものである。

これまで「くすのき」を使用してきた経験では、受講している学生のレベルによって授業の進度を調整せざるを得ず、「会話等」（「会話」だけでなく、課によっては日記やメール、物語なども含む）に十分な時間を使えないということもあった。従って、馴染みのある熊本の地名を使いながら、自然な表現を身につけてもらうという意図で編集した「会話等」が活かされない場合もあるわけで、この点に関しても検討の余地がある。

【表９】で、「生活に関する語」「大学に関する語」についで多いのが、「カタカナ語」と「その他」である。ここに挙げられた語を見てみると、例えば、「カタカナ語」のアドバイスやアンケート、ラーメン、また、「その他」の連れて行きます、体が不自由な、茶道などは日常生活で見聞きする可能性があり、理解語彙としても、使用語彙としても必要であると考えられる。しかし、 ソファ、ヘルメット、ロック（以上「カタカナ語」）、こどもの日、ぬいぐるみ、一晩、火星（以上「その他」）などは、初級教科書に提示する必要があるかどうか再考すべきであるかもしれない。

最後に、11語あった「助詞、副詞、連語等」について見ることにする。まず、助詞はもともと「３・４級語彙」にも「基本語彙」にも取り上げられていないが、「くすのき」では、特に使用法などを習得してほしいものは「新しいことば」として提示した。副詞については、「早く」は４級形容詞「早い」、「すごく」は３級形容詞「すごい」で提出されており、「今」や「まだ」は４級副詞として提出されている。しかし、実際には「早く」「すごく」（副詞）や「たった今」「まだまだ」（連語）の形で日常会話に使用されることが多いと考え、編集方針に従って取り上げたものである。

ただ、今回の調査で、４級語彙の「たぶん」「たいへん」や、３級語彙の副詞で日常的に使用頻度が高いと思われるものが提示されていないことが明らかになっている（３.２）。動詞や形容詞の提出語彙の選定に関する問題も明らかになっており（同）、編集を始める際に、どのような語彙を、どんな順序で提出するかなどを事前に決めておかなかったために、「くすのき」の編集意図と異なる結果が生じてしまったことも、認めざるを得ない。

5.「くすのき」の語彙選定に関する諸問題を解決するために

自主教材「くすのき」の語彙選定に関する問題点について、主に「３・４級語彙」と「基本語彙」を基準にしながら検証してきたが、、神崎・今西（2007）でも指摘されているように、「現在、国の内外で広く使用されている数種の初級教科書を基礎資料として」選定された「日本語能力試験出題基準」が、各種教材でのレベル認定や現場の日本語教員の判断と一致していない場合も少なくない。また、「日本語教育基本語彙」については基礎資料の文献の出版からおよそ20年経過しており、この間日本語の語彙体系にかなりの変化が生じているため、新しい言葉（例えば、外来語や新しい機器類に関する語など）が含まれていないという事実もある。

今回の調査を始めるに際して、「３・４級語彙」と「基本語彙」の他に、現在使用されている主要な初級教科書の提出語彙についても分析・検証し、これらを合わせて「くすのき」の語彙選定の問題を明らかにしたいと考えていた。しかし、この調査が時間の関係で出来なかったため、今回は「３・４級語彙」と「基本語彙」を基準にしたこれまでの検証を踏まえ、語彙選定に関する問題について考察を進める。

まず、前章までの検証で明らかになった主な問題点は、以下の３点である。
①総語彙数が少ない。
②特に「３・４級形容詞」が少ない。
③初級レベルの学習者には必ずしも必要でない語彙が含まれている。

①については、【表１】（２.１）でわかるように、現在使用されている主要な初級教科書３種の提出語彙は、一番少ない『SFJ』でも「くすのき」（964語）の1.45倍（1401語）、最も多い『初級日本語』の場合は1.73倍（1667語）であり、「くすのき」の総語彙数はかなり少ない。これは、「初めて日本語を学ぶ学生の負担にならないように」という配慮から、提示する語彙数を出来るだけ抑えようとした結果であるが、これまで「くすのき」を使用してきた率直な実感では、この編集方針は基本的には間違っていなかったと思っている。

提出語彙が多い教科書では、当然各課に提示される「新しいことば」が多くなっている。意欲があり能力も高い学生であれば、「新しいことば」は覚えるべきものとして習得していくだろうが、動詞や形容詞の活用に躓いたり、

どんどん増えていく文型の習得に苦戦している学生にとっては、課が進む毎に多くの新しいことばも同時に覚えなければならないのは、かなり負担が大きいはずである。

従って、「くすのき」では、「必ずこれだけは覚えなければならないもの」として提示する「新しいことば」は出来るだけ絞り、覚えていれば役に立つ語、あるいは出来るだけ覚えて欲しい語は、本文の練習の空きスペースに「参照語彙」として示したり、「家族図」「会社組織図」「職業名」などを表にして示したりした。また、前にも述べたとおり、「会話等」の中でフレーズとして提示した言葉や表現（これらは、語数には含まれていない）も多く、学生の能力や必要に応じて習得できるようにしている。「外国語の語彙は、文脈から離れて一つ一つ機械的に覚えようとしてもなかなか定着しない」というのはよく指摘されることである。この観点からも、日常的に使われるフレーズの形で習得できるようにしたことは、方向性としては良かったのではないかと考えている。

ただ、②の「３・４級形容詞」が少ない、という点については、今後改善すべきであろう。「くすのき」で初めて形容詞を導入する７課を編集する際に、取り上げる形容詞の語彙、その数をどうするかについていろいろな意見があった。一度にまとめて提出すると、活用と同時に語彙もたくさん覚えなければならず、負担が大きくなる。したがって、７課では語彙数を制限し、次の８課、９課で追加するという結論になった。しかし、この３つの課で提出する語彙だけで十分なのか、不足するとすればどんな語を、いつ、どんな形で追加するのかという点については議論されないまま、編集を終了してしまった。その結果、「４級形容詞」が65.9%、「３級形容詞」が22.2%しか取り上げられておらず、必要語彙が少なすぎると言わざるを得ない。動詞に関しては、編集を始める前に最低限の必要語彙をリストアップしていたので、特に「４級動詞」はほぼ90%取り上げる結果になっているが、形容詞についてもその作業を行うべきだったと思われる。

この点についての今後の改善策として、一つにはタスク練習で補うという方法が考えられる。教育現場で授業をする場合、教授者が教科書以外のタスク練習を用意し、その中で教科書の提示語に関連する語を加えながら進めることは、よく行われることである。例えば、「赤い」が教科書の中に提示されていて、タスクの中で「青い」「白い」なども使って練習するなどという場合である。

しかし、このようなやり方では、そのときの教授者によって取り上げる語彙が異なり、当然語彙数の増減もあり得る。実は、「くすのき」試用版が出来上がった当初から、教科書の練習だけでは十分な定着が出来ないので、将来は不足を補うワークブックを作りたいという意見があった。ワークブックでタスク練習などが補充できれば、その中で教科書に提示しきれなかった語彙を追加することが出来、誰が担当しても選択する語彙が変わったり、語彙数の増減が生じることもなくなるだろう。また、巻末に、例えば「色」「食べ物」「専門」「趣味」などの範疇別に語彙リストを載せ、学生が各自の必要性や能力、関心に応じて柔軟に利用できるようにするのも、一つの方法ではないかと考えられる。

最後に、問題点③について考える。繰り返し述べたように、「くすのき」は、「熊本に来た留学生が、大学や日常生活などにおいて実際に経験するであろうと思われる場面で活用できる表現を学習し、使えるようになる」という編集方針で、これまでの「初級語彙」の概念に拘束されることなく、必要と思われるものは提示するという共通認識の基に語彙選定を行った。その結果、４章に挙げたように、「くすのき」独自の語彙の割合が比較的高くなっていることが、数量的にも明らかになった。

特に名詞に関しては、その教科書を使用する学習者のニーズや教授法によって、各教科書間の異なり語数が増えやすいと言われるが、「くすのき」が提出した名詞も、他の品詞に比べると独自のものが多くなっており、その中に、必ずしも必要でないと思われるものも含まれていた。各課の編集担当者が、学習者が興味を持って練習できるようにという意図で、話題を選び工夫した結果、特異な語を使用することになったケースもあるが、「学習者の負担を軽減する」という基本方針に立ち返り、今後再度検討して、精選するべきであろう。

6. 終わりに

自主教材「くすのき」は、試用版作成まで２年半を要し、その後も学期終了ごとに修正を重ねてきた。単純な語句のミスから学習項目の入れ替えまで、予想以上に時間も手間もかかったが、３年・６学期が過ぎて、内容の修正はほぼ終了した。今回は、最後になった語彙選定に関する問題ついて、調査・検討を進めてきたが、漠然と感じていた問題点が明確に示されることになり、今後の改善策についても、ある程度の見通しを持つことが出来た。

我々現場で教える教師は、市販の教科書について安易に苦情を言いがちであるが、実際に作成に携わってみて、自分達の目指すべき教材に仕上げることがどんなに大変であるか、身をもって実感することになった。「コミュニカティブな教材」と言っても、代入練習や変換練習を完全に排除することは出来ないし、語彙選定に関しても、これまでの「初級語彙」の概念に縛られないようにしようと決めていたにもかかわらず、改めて検証してみると、やはり最低限必要な語彙については、始めにリストアップしておくべきだったという結論に至った。

実は、今後本学国際化推進センターの日本語教育の中で、「くすのき」の使用がどうなるか不透明なところもあり、語彙選定の改善やワークブックの作成などをどう進めるのか、現時点ではまだ方針を立てられずにいる。これまで５年余り、時間と労力を重ねて編集に携わってきた者としては、解説書の完成とワークブックの作成までやり遂げて、当センターの日本語教育にわずかでも役立ててもらいたいというのが、正直な気持ちである。

注

(1) ３・４級文字/語彙の「出題基準」は、「現在、国の内外において広く使用されている数種の初級用教科書を基礎資料とし、日本語教育に関する語彙調査を参考資料として作成した」とされている。しかし、現場での実感としては、３級語彙に関しては、初中級や中級レベルの教科書で提示されているものがかなり含まれているように感じられる。

(2) 各教科書を調査したわけではないが、これまで著者達が使ってきた教科書の提出語彙を考えたうえでの判断である。今後、機会を改めてこのような調査もやれればと考えている。

(3) 実際には他の主要な初級教科書の語彙と比べて初めて〈独自〉と言うべきであるが、時間の関係で今回は取り敢えず３・４級語彙と基本語彙のみに基づいて考察した。

参考文献

今西利之・神崎道太郎（2008）「日本語教育初級教科書提示語彙の数量的考察」熊本大学留学生センター紀要 第11号

片山きよみ・上村文子・舛井雅子・柳田恵理子（2008）「コミュニカティブな初級日本語教材の開発をめざして」熊本大学留学生センター紀要 第12号

加藤彰彦（1964）「日本語教育における基礎学習語」日本語教育４，５号

神崎道太郎・今西利之（2007）「日本語教育における初級語彙をめぐって―初級教科書の語彙選定に関する諸問題―」日本語日本文化教育研究会 間谷論集創刊号
国際交流基金・日本国際教育協会（2002）『日本語能力出題基準（改訂版）』凡人社
国立国語研究所（1984）『日本語教育のための基本語彙調査』秀英社
阪本一郎（1984）「私の基本語彙論」日本語学 Vol.3

参考教科書

スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語初級』
筑波ランゲージグループ（1992）『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』凡人社
東京外国語大学附属日本語学校編著（1990）『初級日本語』 三省堂